

# 令和元年 第8回 根室市教育委員会 会議録

## 1. 公開案件の審議

なし

## 2. 非公開案件の審議（会議録省略）

- (1) 議案第23号 令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査「北海道版結果報告書」への市町村別結果の掲載について

結論 原案どおり決定

- (2) 議案第24号 第2期根室市子ども読書活動推進計画（案）の策定について

結論 原案どおり決定

- (3) 議案第6号 事務の臨時代理の報告について

結論 原案どおり決定

## 3. 意見交換

### ○目的

教育行政の課題についての情報共有、さらには頂いた意見を今後の事務を進める上での参考とするために行うもの

### ○テーマ

- ・「学校における防災 子どもたちの命を守るために何をすべきか？」について

### 【 教育部長 】

今回の意見交換テーマは、「学校における防災 子どもたちの命を守るために何をすべきか？」とする。報道等でご存知かと思うが、本年10月東日本大震災の津波で犠牲となった宮城県石巻市の大川小学校の児童23人の遺族が訴えた裁判で最高裁は石巻市と宮城県の上告を退ける決定をし、14億円あまりの賠償を命じた判決が決定した。教諭らの避難誘導に過失があったなど、震災前の防災対策の不備を理由に賠償を命じた判決は国内では初めてである。二審においては市の教育委員会は学校の対策に不備があれば指導すべき義務があるのに怠ったとの指摘もされている。これを受け、私どもの根室市教委では校長会・教頭会を通じまして各学校の危機管理マニュアル、地震・津波の精査及び教職員への情報共有の徹底をお願いしたところである。余談ではあるが、石巻市はこの14億円を払うことができず、宮城県に一時借り入れをし、宮城県が肩代わりして分割して宮城県に返していくという対応をしているようだ。参考として、各学校の海拔20メートルをきっているのが花咲小学校、歯舞小中学校が20メートルとなっている。浄水場が根室市内で一番海拔が高いと言われており、そこに近い光洋中学校、成央小学校、根室高校は海拔が高くなっている。市の総務防災担当では「こども防災・減災推進事業」と称し、今年度より市内すべての小中学校で防災教室や避難訓練の協力を行っている。昨年度までは希望した学校だけで防災教室をしていたが、今年度からは小中学校全てで行っているということで、泊まりこみでやっているところもいくつかある。

また、避難所生活の為にいろんなグッズを買って体験してみるというのも今年度から本格的に始めたところである。

宮城県の大川小学校の関係だが、当時、校長先生が不在であり、学校側がどこに避難させるかで戸惑い、全員を校庭の真ん中に集めたが、学校のマニュアルでは『高台』としか表現しておらず、どこにどう避難するということが決められていなかったとのことである。本来は低学年でも5分でいける裏山に行けばよかったのだが、逆側の大橋のたもとに向かってしまい、その途中で津波がきてのまれてしまったということである。そこも事前のマニュアルできちんとしていなかったというところがポイントになっていた。大川小学校の一連の中身を見ていくと、保護者の方は当時、「孤立しているけど大丈夫だと聞いていた」、「学校にいれば大丈夫、校舎の2階にでも避難していると思っていた」など結局子どもさんの様子が分からないままに一晩過ごしていたということが明らかになっており、やはり子どもの状況を知りたかったという意見が多く、今だとLINEだと学校が情報発信できるとか、グループLINEを作っておいて災害時の子どもさんの様子など非難できたとき、余裕ができたときにその様子を伝えたりだとか、そういうことも学校側には求めていく時がきているのかなと考えたりして、皆さんの保護者としての立場でこういうことが学校側で出来たらということを中心に意見を伺いたい。

#### 【 委 員 】

学校は避難訓練などをやっていると思うので、保護者への連絡方法をしっかり考えてもらえたらと思う。海拔の低い所が20メートルというのはどのくらい危険なのか。

#### 【 教育部長 】

市内の小中学校の中では唯一歯舞小中学校が津波の最大浸水深3メートル以上～4メートル未満に入っている。学校もそうだが、歯舞児童教室は歯舞会館に入っているため、避難訓練ではとにかく走って、向こうの牧場まで逃げるということをやっている。

#### 【 委 員 】

太平洋側とオホーツク海側は違うのか。

#### 【 教育部長 】

オホーツク海側は浸水地が浅いというか、浸水地が沿岸部分になっているが、花咲小学校はオホーツク海側の近い位置にあるため、花咲小学校長はマニュアルの改訂をしまして、啓雲中学校に逃げる、文化会館まで逃げるなどのシミュレーションをしていた。

#### 【 委 員 】

太平洋側は津波が来る印象があるが、オホーツク海側はあまり来ないという感覚がある。町内会で話し合いをしたときには、ある方が以前、避難所に避難したとき、「避難民1名来ました」と市役所に連絡しているのが聞こえて、恥ずかしくなっ

自宅に帰ったと話している方がいた。子どもだと啓雲中学校の生徒がこまば保育所の子どもと手をつないで避難させるという訓練をやっている。

【 教育部長 】

想定外の時はまさかという意識が強く、高潮災害の時には図書館に避難してくださいという電話をかけたり、担当が個別に回るということをやっていたが、なかなか避難してくれないということがあった。

【 教育長 】

保護者という立場でこういったマニュアルがあったらいいといった意見はあるか。

【 委 員 】

学校からの情報発信はLINEがやはり一番伝わりやすいかと思う。また、SNSなどで発信するのも有効かと思うが、情報を集約したりするとなると実際には難しいものなのか。

【 教育部長 】

市議会でもその質問が出て、子どもにとって有効なものは活用すべきということはある。ただ学校としてどのように運用するのか、例えばグループを作って運用していけるのかというのは現場ともこれから相談していかなければいけない。電話がつながらなくなったときでも、LINEは有効だということもあったため、使えるSNSというのは活用し、保護者の方に安心していただくためにも状況は伝えられるタイミングで伝えていきたいというのは考えている。

【 教育長 】

学校は電話でしかつながっていないというところがあるため、昨年のブラックアウトの時には学校の電話が使えなくなり、携帯電話等で連絡をとるしかないという状況が続いたことや、停電が続いたことで次々に電源が落ちていき、結果的につながらなくなってしまったという実態も経験したため、2重3重の安全なネットワークを使っていくかが課題だと考えている。

【 委 員 】

学校ではそれぞれ非常食などを用意しているのか。

【 学校教育指導参事 】

しっかり支給してある。食料品の備蓄だけではなく、自家発電機も各学校に配置されていて、昨年度のブラックアウトの時には携帯の充電の為に活用した。もし配

置されていなかったら、情報の繋がりがとれなかった。また、現在訓練しているが、落石小中は保育所と連携しながら、災害が起きた時に保護者に子どもたちを引き渡す合同訓練で、子どもたちを家に帰すということではなくて、避難している子どもたちを避難所に保護者が子どもを引き取りにくる、確実に引き渡すという、そういう訓練が必要じゃないかなと。歯舞小中や歯舞の保育所についてはそういう避難所との連携が必要なのかなと。現在、学校現場の連絡網は電話ではなく、メール配信であって、臨時休校や学級閉鎖などについても、全部メール配信できるようにしている。メール配信の方が確実に保護者のケータイに連絡できるのでいいだろうと。ただSNSは誤報というか、間違ったものが投書されていることもあるため、一番確実なのはLINEではないかということで、文科省の方も進めている状況である。

【 教育長 】

今後どのような対策をすべきか、対策を考える上での参考とさせていただく。

午後2時15分 閉会